

「ニーチェとフロイト」

中 村 玄 二 郎

ニーチェとフロイトの思想的近親性は、以前から各研究者によって指摘されてきた。この二人は、ヨーロッパの伝統的な思想に対して、いはば反旗をひるがえしたのであるが、それによって世間からの冷笑・非難に直面しなければならなかった。それも単なる冷笑・非難をこえてむしろ嫌悪の念すらもって世間から迎えられたのである。しかしそれにもかかわらず、二人はあえて世間の攻撃に対し何ら臆することなく敢然と立ち向かい続けそれぞれ新しい時代を導く思想の礎を築き上げたのである。その意味で二人は一九世紀が生んだ巨人といえよう。

では、何故二人が世間と前に述べたような関係を持つに至ったかという点、二人ともあえてタワーに踏みこんだからである。このタワーは、永い年月を経てヨーロッパ人の精神の中にしっかりと根を下ろしたものである。人々の生活の根本を支えるものであったからである。このタワーにニーチェとフロイトは、それぞれ哲学と精神医学という異なった領域から踏み込んだのである。そして同一の問題に行き当たることになるが、その方法には大きな違いがみられる。哲学者と医者（科学者）という立場の違いがそれぞれ異なった方法を二人にとらせることになった。ニーチェは直観と思索に導びかれ出発点からこのタワーを攻撃し、フロイトは精神科医と

して治療にとりくむうちにデータに導かれて同じ問題へと行きついたといえる。

本稿は、この二人が問題とした共通のものを明確にすると同時に、二人の思想の歴史的意義に言及するものである。

※

まずはじめに、両者の相互関係について検討してみたい。年齢的にはニーチェが一八四四年生まれの十二歳上であり、しかも彼は一八八九年四十年代の半ばにして発狂してしまい、十年後の死に至るまで彼の精神が正常に戻ることはなかった。一方、フロイトが『ヒステリー研究』をもって自己の研究成果をはじめて世に問うたのが一八九五年のことである。両者の活動する学問分野の違いをも考えるとき、ニーチェがフロイトの存在を知ることとは不可能なことであったにちがいない。

それに対して、フロイトは一八九〇年の末にはニーチェのことを知っていたことはほぼ確実とみられる。彼の最初の名著『夢判断』は一九〇〇年に出版されているが、この中でニーチェに言及している部分がある。しかし、このことはだからといってフロイトがニーチェの影響を受けていることを意味する訳ではない。後年のフロイトの言葉を引いてみればその間の

事情はある程度明らかとなる。

「……もう一人の哲学者ニーチェについて言えば、彼の予見と洞察とは精神分析が骨を折って得た成果とおどろく程よく合致する人であるが、いわばそれだからこそなお、それまでながい間避けていたのであった。優先権よりは公正さを保持することの方が大切だと思われたからであった。」⁽¹⁾

これは一九二五年の講演における自伝の中で述べている言葉である。ここでは、自己の研究成果とニーチェの思想との類似を明言しているが、ニーチェからの如何なる影響もろくがわせるものはない。しかし、避けていたという言葉が示すように、ニーチェに関する情報をすでにフロイトは手にしていたことは確実と思われる。

「後年になって、意識的な動機をもってニーチェの作品を味わうことを避けたのは、精神分析よっての印象を整理するにあたって期待的観念によつてさまざまげられたくなかつたからなのである。」⁽²⁾と先の引用の十一年前にも述べている。

これは一九一四年の『精神分析運動史』の中で語っている言葉であるが、フロイトがニーチェの作品自体にも目を通していたことを物語っているといえよう。そして、ニーチェという人物の存在についてのみならずフロイトがニーチェの思想にもある程度通じていたことは、先の『夢判断』の記述をみても明らかである。

「夢の中に一片の原始的人間性が働き続けており、人は直接的にはもはやそこへは到達しがたいVというフリードリッヒ・ニーチェの言葉がいかんまを射ているかよくわかるような気がある。」⁽³⁾

これは夢における退行、つまり夢は小児期に支配的だった衝動の動きやその時期の表現方法の再生であることに触れた個所で、ニーチェの名を挙げている部分である。

更に、一九一五年の『精神分析的研究からみた若干の性格典型』の中では、「ある友人が、ニーチェもまた八罪の意識から罪を犯す人間Vの存在を知っていたことを私に教えてくれた。なるほどそういわれて気がついたのだが、罪悪感の先在、またその罪悪感を合理化するために罪を犯すことなどは、ツアラトウーストラの八蒼白なる犯罪者についてVの言葉から読みとれなくもない」と述べている。⁽⁴⁾

一九二一年の『集団心理学と自我の分析』では、「原始群族の父は、……人類史の端緒において、ニーチェが未来に期待したところの超人であった」という記述が見られる。⁽⁵⁾

また、一九二三年の『自我とエス』の中の注で無意識的な衝動をエス(ES)と呼ぶことに関して、「グロデック自身、たしかにニーチェの例にしたがっている。ニーチェでは、われわれの本質のなかの非人間的なもの、いわば自然必然的なものについて、この文法上の非人称の表現エスがいつもつかわれている。」⁽⁶⁾と述べている。

これらの引用箇所をみると、フロイトがニーチェの思想にかなり通じていることは疑いえない事実であると思う。そして、エス・自我・超自我というフロイトの自我論の中心概念のうちその根本をなすエスについては、ニーチェの用語を採用していることを匂わせているほどである。従つて「ニーチェの『道徳の系譜』は、人間の本能生活に対する深い直感的な知識を示している。フロイト以前に一種の人間の本能発達史を生み出したのはニーチェであった。フロイトはその学問上の仕事の多くをなしとげてしまふまではニーチェを読んだことはなかつた。」⁽⁷⁾という、G・シルボグの言葉は、そのまま認めることはできない。また、トーマス・マンの「フロイトはその作品の随所にフロイト的洞見が閃光のごとく先取されているニーチェを知らず」という言葉も事実とは少し異なっているといえる⁽⁸⁾

だろう。

以上で両者の関係については一応結論らしきものが浮かび上がってきたといえるだろう。

ニーチェはフロイトを知らず、フロイトはニーチェの存在と思想を知りつつも、独自の方法で自己の思想を形成していった。その際、ニーチェの思想がどの程度フロイトに影響を与えたかは不明である。むしろ両者は、時代精神とでもいうべきものに導かれて、同一の世界へと足を踏み入れていった、ということになるだろう。

そして、両者が踏み込んだ同一の世界とは、人間精神にとって未知の領域である、無意識という暗闇の世界であった。

※

フロイトは、神経科の開業医として一八九二年ウィーンでデビューするが、当時の彼はヒステリー症状を代表とする諸々の神経症に関してその原因をつきとめることができず、確固とした有効な治療法をまだ見い出してはいなかった。そこで、世間一般の神経科医と同様、たいして治療効果の上がらない伝統的治療を続けていかざるをえなかった。その間にフロイトの注目を引いたのが、催眠術を利用した治療法であった。これは、一八九〇年パリ留学の際に、サルペトリエール病院のシャルコーから学んできたものであったが、かなりの治療効果を上げることができた。ただ催眠療法には欠点があって、催眠術にかからない人がいるということ、また医師の希望する深度まで催眠状態に導くことが困難な場合があること、症状の部分的な除去はできても、再び他の症状が表われやすく、完全な治癒にもっていくことがむづかしいことが悩みの種であった。

催眠療法を用いながらも、より良き治療法を模索する過程でさしてきた光明は、先輩の開業医J・ブロイエルによる過去の治療例であった。これ

は、一八八五年アンナ・O嬢というヒステリーの女性に対して行われたもので、ブロイエルは催眠療法によって彼女を治療するうちに、過去の出来事を思い出して話させるだけで彼女の症状が一つずつ軽快してゆき、最後にはほぼ治癒にこぎつけることができたというものであった。このおしゃべりによる治癒という事実を、患者は治療中に面白がってへお話し療法Vと名づけていた。

このアンナのケースは強くフロイトの注意をひき、その後ブロイエルと二人でヒステリーについて共同で研究を進め、一八九五年には『ヒステリー研究』を二人で発表している。後にブロイエルが研究から手を引くことによって共同研究は終止符を打つことになるが、ブロイエルが扱ったアンナの症例は、フロイトが彼独自の方法である自由連想法を築き上げる上で重要なヒントとなったのである。

催眠療法からお話し療法を経て自由連想法という新しい治療法が確立された意義は、もちろん極めて大きなものである。しかし、更に重要なことがこの過程で導き出されることになる。それはヒステリー症状のメカニズムの解明によって、ヒステリー患者の心のあり方が明らかになったことである。

多種多様な症状を呈しながらも、その病因を身体部分に認めることができず、当時謎の病気とされていたヒステリーの原因は心因性のものであることがかなり明らかになってきたが、これは催眠現象とヒステリー症状の類似性から明らかになってきたものである。

催眠現象は、外から施術者によってある観念を人為的に吹き込まれることによって、例えば麻痺という状態が表われるが、被術者はへ麻痺しているVという観念によって支配されているのである。しかも本人はこの観念について意識することは全くない。ということは、被術者にとっては、意

識されているもの他に意識されていない観念が心の中に存在し、しかもそれが当人の現在に強力に作用しているという事がありうるということである。後催眠現象はこの事実を特に明確に物語るものである。

ヒステリーについても同様のことが言えるのではないだろうか。先に述べたシャルコーの実験は、催眠術によって人工ヒステリーを引き起こすことであった。もし催眠術によってヒステリー症状を作り出すことができれば、被術者は身体的には何ら症状の原因を持たないのだから症状の原因は完全に心理的なものであることになる。ヒステリーの患者は、例えば手が麻痺している人ならば、左手が動かないVという観念を心の中にとり込むことによって、手が麻痺しているということになるだろう。しかも、患者自身がこの観念について知るところがない点も催眠の場合と全く同様である。ただ催眠現象と違う点は、この観念が他人（施術者）によって外部から吹きこまれたものではなくて、自ら無意識の内に作り上げ、自分の心の中にとり込んでしまったものであるという点である。ヒステリーの場合も催眠と同じように、意識されなにかたちで、ある何らかの観念が患者の現在に強い作用をおよぼしているということが明らかになったのである。

このように考えたとき、治療に光明がさしてくると同時に、これまで闇に閉ざされていた心の神秘の扉にわれわれは一歩踏み込んだことになったのである。

治療の面では、ある観念の反対観念を、ヒステリー患者を催眠状態に導いて与えてやれば症状は除去できることが分かった。催眠術を用いた暗示療法である。もちろん先に述べた限界があるにしても、これまで治療法も見つからなかったことを考えるとき一大進歩といえるだろう。

しかし、フロイトは更に前進して、無意識の内に閉じこめられている、患者にとって苦痛な体験（回想）を意識化させてやることと、それと同時

にこの回想にもなっているせき止められた情動量を発散させてやることによって、治療は劇的な効果を上げることが明らかになった。このことは、ブロイユルの症例アンナのお話し療法を糸口に共同研究の結果獲得したものである。

フロイトはこのことを次のように記している。「われわれは、誘因となる事象の回想を完全な明白さで喚び起こして、それによって、これに随伴していた感動をも喚び覚ますことに成功し、しかる後に、患者が自らその事象をできるだけ精細に叙述してその感動に言葉を与えれば、個々のヒステリー症状はたちどころに消滅し二度と起るものではない。⁽⁹⁾」

この新しい発見によって、フロイトは精神分析学を築き上げてゆくのであるが、更に明らかになったことは、「ヒステリーとは無意識裡に作用する回想の後裔であり⁽¹⁰⁾」、「どんな症例から、またどんな症状からはじめたとしても、最後にはかならず性的体験の領域にたどりつくものだ⁽¹¹⁾」ということである。

フロイトは、同僚ブロイユルの類催眠ヒステリー説に対して防衛ヒステリーという概念を主張する。過去の苦痛な体験・欲求を心の中に抑圧した結果がヒステリー症状となって身体部分に現われるのであるが、この抑圧自体は自我を防衛するための作用だというのである。そして、この苦痛な体験・欲求の中核をなすものが性的体験・性的欲求であるということを知ることによって、人間の生の原動力として性衝動を中心とする生物学的エネルギーの存在を提唱するに至るのである。

抑圧されて無意識化された衝動（欲求）がある人の現在に作用しているということ、そしてこのことはヒステリー患者という病人の心のみならず健康人の心においても同様であるということをフロイトは明らかにしたが、これによって人間の心の複雑なしくみがしだいに解き明かされてきた

のである。

デカルトのコギト以来、人間が他の全てのものと区別される由縁は、自己意識を持つという点にあり、自己の思考・感情・行動の主体は常に明晰な意識であるというのが近代以降のヨーロッパ人の疑うべからざる確信であった。しかし、ヒステリー・夢・日常の生活心理の研究を通して、フロイトは無意識的なるものの強い支配力を証明した。更に、この無意識的なるものの正体をフロイトは、動物とも共有している本能的衝動と考えることによって、当時のヨーロッパ人の常識を大きく揺がすことになったのである。

人間は精神を持つことによって、他の動物とは区別され、しかもこの精神は生得的なものである、という見解に対してフロイトの説は真つ向から対立するものである。従来、醜悪なもののみなし、無視し続けてきた本能的なものこそ、人間の生の根本を成すものだという考えは、人間の神聖性を否定するものと受けとられて、世間の非難を浴びずにはいらなかった。しかし、このフロイトの勇氣ある主張によって、我々は、リアルな人間理解へと大きな歩みを進めることができたといえるだろう。神聖なる人間精神・理性という錦の御旗のかげで、人間の真実の生の姿が如何に歪曲されてきたかを考えるときこの感は一層深いものがある。深層心理の世界、無意識の世界の発見は、フロイトが人類になした最大の功績と呼んでさしつかえないであろう。

※

一方、フロイトが病める心の治療を通じて科学的に認識を深めていったこの暗闇の世界に、詩人の直観と哲学者の思索で踏み込んだのがニーチェである。「骨のおれる精神分析による研究が、哲学者が直観によってとらえた洞察を確かめるだけにすぎないという場合がしばしばあって」と、フ

ロイトがニーチェの作品を避けた理由を語っている言葉は、ニーチェの立場を端的に物語るものである。ツヴァイクは、「その哲学的思惟においてニーチェが鉄槌をもって考えたのなら、フロイトは生涯、解剖メスをもって考えてきたと言えよう」と述べている。⁽¹³⁾

このように両者の態度には大きな違いがみられるものの、問題にしたものは同じものといえよう。△神は死んだ▽として、キリスト教批判を展開したニーチェは既成の価値の破壊者であったが、この破壊の過程で彼は従来の価値の正体を暴露するのである。このことが、最も明確にされているのは、道徳の領域である。「道徳的現象などというものはまったく存在せず、あるのはただ、現象の道徳的解釈だけだ……」⁽¹⁴⁾というニーチェの言葉は、彼の道徳問題に対する態度をはっきり物語るものである。

そこで、この道徳の正体としてニーチェによってとり出されたものが、弱者のルサンチマンなのである。「道徳における奴隷一揆の手始めは、△怨恨 *ressentiment* ▽そのものが創造的となって、価値を生み出すということである。本当の反撥、行動による反撥ができないところから、単に想像上の復讐によって、自己のうけた損害の埋めあわせをつけるような人たちのいだけ△怨恨▽が、価値を生み出すのだ。」⁽¹⁵⁾ニーチェは人間の本質を△力への意志▽と規定しているが、強者に対してこの△力への意志▽を行使できなくなった弱者が、それでもこの意志を実現するために行った論理のすりかえが道徳だと言っているのである。強き者を道徳の観点からみて悪として、弱き者たる自己を善として強き者の上に置いたのである。この典型をニーチェはキリスト教に見い出すのであるが、弱者は価値を逆転させることによって、強者を支配するべく△力への意志▽を現実化しているという訳である。「柔和な人たちは、さいわいである。……あわれみ深い人たちは、さいわいである。……平和をつくり出す人たちはさいわいで

ある。……義のために迫害されてきた人たちは、さいわいである。……」
というマタイ伝第五章の山上の垂訓は、まさに弱者の△怨恨▽がつくり出したものということになる。神聖なるものと考えられてきた道徳・宗教の根本が、これらが醜悪なものとして排除してきた△怨恨▽・復讐本能だとすれば、ニーチェの主張は当時のヨーロッパ人の神経を逆なでせずにはおかなかっただろう。人間精神が削り上げたとされる数々の神聖なるものの根底には動物と何らかわらない本能が働き続けているというこの洞察は、先に述べたフロイトの見解を先取りしていると言ってもさしつかえないように思われる。

ニーチェが直観と思索によって、フロイトの精神分析が明らかにした事柄に踏み込んでいたということは他にいくつも例を挙げることができるが、以下に二、三例を引いてみたい。

「われわれの道徳的な判断や評価は、われわれに知られない生理的過程の幻影と想像、一定の神経刺激をあらわす一種の習慣的言語にすぎないこと、すべてのわれわれのいわゆる意識は知られない、おそらくは知り得ない、しかし感じられる原文の多かれ少なかれ空想的な註釈である。」⁽¹⁶⁾ ここには、人間の思考・感情・行動の根本にある無意識的なるものの重要性への指摘を認めることができるだろう。

「忘れるということは、単なる△惰力▽ではない。これはむしろ一種能動的な、最も厳格な意味で積極的な阻止能力なのだ。この能力のおかげで、われわれが体験・経験し、われわれのうちに取り入れられるものが、意識面にあらわれないですむのだ。……これが意識にのほらないことは……われわれの神経の世界が……騒ぎや戦いに煩わされなですむこと、意識に小康を得させ、意識を少しばかり△白紙状態▽にすることである。」⁽¹⁷⁾

ここでは、フロイトによるヒステリーの病因論や日常生活における錯誤行

為の原因論が思い起こされる。ヒステリー患者は、過去の苦痛な体験を抑圧し意識から排除つまり忘却する。そして、それによってヒステリー症状に悩むという代償をはらわねばならないにしても、一応現在の患者の自我は心の平安を維持しようとするのである。これが防衛ヒステリーのメカニズムであるが、ヒステリーという点を除けば、ニーチェのこの考え方はフロイトと同一線上にあるといえるだろう。錯誤行為、例えば度忘れにしても、それによって都合の悪いこと、苦痛な事柄から自我の平安を守るという意味を持つものであるから同様のことが言えるだろう。つまり、フロイトの抑圧のメカニズムのニーチェ的表現といえることができるだろう。

「△これは私がやったことだ▽と、私の記憶が言う。そんなことを私がやったはずがない——と私の自負が言い、そして頑としてゆずらない——ついに、記憶が譲歩する。」⁽¹⁸⁾ ここでの記憶とは、意識つまり自我、自負とは無意識的な超自我と解釈すると、自我を無意識の領域で罪悪感・羞恥心をもって脅やかし続ける超自我のあり方について言及していると受けとることができよう。

「もつともな不合理。——生と悟性が成熟すると、人間は、彼の父親が自分を生んだのは不当だったという感情に襲われる。」⁽¹⁹⁾ 「両親が生き続けること。——両親の性格と心情の関係における解けがたい不協和音は子供のなかで響き続け、彼の内的な苦悩史を作りなす。」⁽²⁰⁾ 「母親から。——誰でも母親から女性の像を受けて、心の中に持っている。彼が一般に女性を尊敬するか、軽蔑するか、一般に女性に無関心であるかはこの像によって決定される。」⁽²¹⁾

これらの記述は、フロイトのエディプス・コンプレックスを思わせないだろうか。

最後に、エディプス・コンプレックスの名残りとフロイトが説明してい

る超自我の成立を思わせるニーチェの記述を挙げてみたい。

「良心の内容。——われわれの良心の内容は、われわれが少年時代に……尊敬し怖れた人物たちによって要求された一切のことである。……それは、人間の胸中の神の声ではなく、人間の内部にいる数人の人間の声である。」⁽²²⁾

「父の代にはまだまだ虚言だったものが、子の代にいたって確信となるのである。」⁽²³⁾

※

以上みてきたように、ニーチェとフロイトは思想的には極めて近親性をもっているといえるだろう。ただ、一方は哲学者として、他方は科学者としてその思惟方法には大きな違いがあることは事実である。しかし、両者共に、まだ神聖なる人間精神という神話を固く信じ込んでいたヨーロッパ世界に対して、無意識的なるもの的重要性を指摘し、人間観の変革を迫った点では共通しているといえるだろう。そして、道徳・宗教に仮借ないメスを入れて、その深層にあるものを掘り出すことによって、より真実な、よりリアルな認識へと人類を導く糸口をつくったといえるだろう。

フロイトこそ反基督ニーチェに踵を接して現われた、第二の重大な破壊者である。

—ツヴァイク—⁽²⁴⁾

注

- (1) 『自らを語る』八五頁(日本教文社版フロイド選集一七)
- (2) 『精神分析運動の歴史について』一二〇頁(フロイド選集一七)
- (3) 『夢判断』下三二二頁(フロイド選集一二)
- (4) 『精神分析的研究からみた若干の性格典型』二四七頁(フロイド選集)

- (5) 『集団心理学と自我の分析』一六〇頁(フロイド選集四)
- (6) 『自我とエス』二五八頁(フロイド選集四)
- (7) 『医学的心理学史』三五三頁〜三五四頁(みすず書房)
- (8) 『フロイトと未来』三八一頁(新潮社トーマス・マン全集Ⅹ)
- (9) 『ヒステリー現象の心的機構について』三一八頁(フロイド選集九)
- (10) 『病因論』三七一頁(フロイド選集九)
- (11) 同書 三五一頁
- (12) 『自らを語る』一二〇頁(フロイド選集一七)
- (13) 『精神による治療』三〇二頁(みすず書房ツヴァイク全集12)
- (14) 『善悪の彼岸』一〇八、一二六頁(白水社ニーチェ全集第Ⅱ期二卷)
- (15) 『道徳の系譜』一一一〇、四一頁(ニーチェ全集第Ⅱ期三卷)
- (16) 『曙光』二一一九、一二五頁(ニーチェ全集第Ⅰ期九卷)
- (17) 『道徳の系譜』二一一、六七頁(ニーチェ全集第Ⅱ期三卷)
- (18) 『善悪の彼岸』四一六八、一一三頁(ニーチェ全集第Ⅱ期二卷)
- (19) 『人間的な、あまりに人間的な』一一三八六、上三〇三頁(ニーチェ全集第Ⅰ期六卷)
- (20) 同書一一三七九、上三〇二頁
- (21) 同書一一三八〇、上三〇二頁
- (22) 『人間的な、あまりに人間的な』漂泊者とその影五二、下二六二頁(ニーチェ全集第Ⅰ期七卷)
- (23) 『反キリスト者』五五、二二〇頁(理想社ニーチェ全集)
- (24) 『精神による治療』二九四頁(ツヴァイク全集12)

(本学非常勤講師)